

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 7



令和7年7月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第7号

No.806

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い發生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 七月号 (通巻八〇六号)

◇今月の二十首詠……季節のあわい 泉 嘉穂子 2

■作品 [A] 磯田ひさ子・市原やよひ他 4

A 若林美知恵他 18

B 天野純代他 42

C 池上久代他 54

A さとうちえこ他 66

■オリープ集 河上悦子・神戸良三他 34

◇今月の二人 長尾さち・八巻信隆 14

私と短歌との出会い (275) 綾 央子 17

■牧 雄彦歌文集『メコン渺々』批評 28

五官全開によるメコン讃歌 鮫島 満

歌文集であることの意味 玉井綾子

メコンと、そこに暮らす人々と 久我田鶴子

■〈第一歌集を詠む〉28 32

篠原まり子歌集『ひとりの春』

—絶望から再生へ— 三浦美代子

■遊覧寄港〈東西南北〉 猪狩ユミ子 40

■歌壇月旦 41

「対話集」 檜垣美保子

報告・牧雄彦歌文集『メコン渺々』を読む会 有馬さと子 76

■五月号作品批評 58

A……福田庸子・仲西正子

阿藤たつる・田中純子

B……小原香里・潮田千代

C……泉嘉穂子

オリープ集……もとむらしげと

十首選 岩月宏彦・辰巳洋子 53

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より [編集部] 77

第34回実務委員会報告 57

クリップ……78 神田通信……表3

(表紙デザイン) Taniko Kuga

季節のあわい

泉 嘉穂子

一九四八年生まれ
二〇一三年「地中海」入社
森の会所属
歌集に「石見神楽」がある

朝空を群れ飛ぶ鳩を見送りぬオリブの枝は凍てたるままに

あかねさすうすむらさきの山脈^{やまなろ}を背にしずまるわが学び舎は

坂の上にグランド大きく広がりてキャンプファイヤーの赤きが過ぎる

五百円の硬貨もどりとまたもどる世のシステムにコーラあきらむ

学園の紛争に倦み去りし友コーラ壘残し待てどもどらず

うすら日のたいこ橋より飛びゆけるわれの帽子よ 花びらの舞う

新川に高き音たて鯨跳ねる夕日受ければ尾は金となる

江戸の世の塩の道なる新川の桜まつりは過去にいざなう

まつり果て出店の床几つぎとたたまれなおも円居はつづく

遊戯会にわれは因幡いなばの素兎しろうさぎ 出雲神話の身近にありき

遠き日にうさぎ幾人飛び跳ぬやわらべ歌のみ今もあざやか

素兎がだましましたまされ傷を負うおさなごころに意地悪染みる

大谷と一緒に高校とセールスマンそれがと返すあまのじゃくわれ

旅の朝目覚めうながすうぐいすの鳴き声近し障子を繰りぬ

日はすでに海より上がり真っ直ぐな光まぶしく梢を透かす

海面に流るる霧の濃くうすくやませの風と土地人に聞く

みやげ屋の二階にしろす津波あと浄土ヶ浜に雲の流れて

宮沢賢治けんじ見し浄土ヶ浜は白き浜なせか懐かしふるさとのごと

春早き北国訪えばゆるゆると季節のあわい行きつもどりつ

定期購入サブスクの黒酢は朝のならいにてじゅわりじゅうわりのんど喉に落ちる

作品 A

磯田 ひさ子

ひさし髪

・森

梅 本 武 義

山里暮し

・羊

春浅き会津盆地を縁どれる疎林を透かし光動きぬ
雪残る地表に影のやや膨る雑木林の芽吹きはじまる
音たてて伸びるがごとき勢ひに土筆すつくと立ち揃ひたり
目印の太き桜を仰ぎつつ花の力に吸ひ寄せらるる
踏ん張りて土手の傾りに咲く桜しだるる花の草生に届く
大振りに張りたる桜ひさし髪結ひし晶子のまぼろしの咲く
滝桜を讀ふる草野心平の碑^{いしな} 反り身の隸書華やぐ

市原 やよひ

四月

・萬

大 浪 美 雪

行船公園

・森

赤き車己の位置に帰り来て女孫は今し出発の春
こんな日が来るとは夢思わざり一步一步杖に縋りて
夫使いし杖が私を支えてる手の感触を又も確かむ
痛みの原因分かれば痛み薄らきて花の便りに耳傾ける
花見にと嫁乗せくる車には愛犬「マロ」の先客ありて
夫眠る墓に行く高速道二通り今日は海見ゆ遠回り高速道
ようように痛み遠のき寝につけばする筈のなき夫の声する

八十路越し一年の差を薪割りに腰の衰え如実に感ず
独りにて動くは携帯電話^{携帯}必携と山里暮しの老いの心得
今五年かと思ひおり携帯電話^{携帯}を持ちておればと不明の老婆
竹の子を持ち行き都市のはらからと里の今昔話して尽きず
反感を買う隣人の目立つな好み命にて縁日終る
二馬力の選挙を考案したるとは法律またも悪知恵を追う
狡猾なブーチン目立ち進展なし独善責任転嫁のトランプ

雨あがり宴のさなか公園の桜大樹は満開となる
大窓を額縁としてけやきの木けふるが如き新芽そよがす
池めぐる芝生の上をいつときも休むことなく子かけまはる
池にあるひとかかへ程の黒き岩首を伸ばせる亀にかも似る
一瞬の風に吹雪ける花びらを追ひゆるる亀岩すべり落つ
柳の枝縁にかすむ公園の醒醒朱鷺の緋の色はゆる
ぐゑぐゑと飛びゆくは何 夜なればぬえとか呼ばん声あしき鳥

奥田陽子 道

・辛

いつまでも続く錯覚に好物を持ちてくぐれる病院の門
十年をふたり静かに暮し来てなお続く道と思い居たりし
額の絵の道は未来を指しており未来というは何時の日のこと
院内の時間は速しもうすぐに退出の時窓の暮れゆく
表情も言葉もしだいに乏しけれど幼き子らは夫に寄りゆく
求めたる小さきノートくりゆけどいずれも白く文字ひとつ無し
訊ねてもたずねても苦しくは無いというそのかたわらにただ詰めており

神田鈴子

茨木弁天

・大

三月となればこぞりて湧き出づる木の芽草の芽みどり淡きを
まつたくの枯木と見えし杏の樹みどり見え初む木の芽噴き初む
嫁、孫の花見の誘ひに出かけたり茨木弁天にあふるる桜
しだれ桜、ソメイヨシノにヤマザクラそれぞれ異なるかがやき放つ
色の濃きしだれ桜は枝広げあるかなしかの風にゆれるる
池の面をピンクに染むる花筏しづかな午後に動くともなし
弁天の前に並びて手を合はす親子にはらり桜散りくる

上林節江 寒！

・湾

民主主義の国と仰ぎしアメリカが海市のごとく離るはがゆき
侵攻の国が停戦の条件をつつべつと言う おかしくないか
大國が国土と資源をむしり取るだけの政治であつてはなるまい
獸性の構造物と人間を見まいマザー・テレサがリンカーンがいた
フランスが「自由の女神の返還」を要求とぞよがんばれマクロン
一位ロシア二位はアメリカ三位中国核の数とは覇権か、寒や！
「トランプが」「関税」「関税」と耳障り寒きて瘁らすこともできずに

菊地栄子 春

・海

小銭にて支払う時のもどかしさ催促二回精算機より
家籠もる姉の手製のトートバッグ吾が提げゆけば声掛かりたり
見るとなき鏡は映す八十代半ばに近き老いのかんばせ
遠目にもかすかに咲ける満作は春一番の過ぎ去りし後
帰り路の石垣沿いに立ち尽くす風の通り道逃げ場もあらず
山茶花のくれない深き春の道楽園そこにあると思えり
春の音聞こえるばかりに盛りあがり文学館の噴水は散る

河野繁子

木洩れ日

・雁

浦島草、武蔵鏡と個を保ち季が来たよと春を迎える
複雑に折り畳まれた葉をほどくテンナンショウの神わざの庭
われの世と広葉ひろげて木洩れ日を遊ばす四月平和というは
念願の九輪草、桜草花咲けどやっぱり淋しひとりというは
ながかりし昨年の入院今年こそ桜見せんと我乗す長女
寒あやめ大きむらさき唐突に開きてながし四月の半ば
目標のすみじ芽生えし散歩道二人なりしがひとりて休む

小林能子

「完吾ちゃん」

・羊

花冷えを言ひ訳にして重ね着にコルセット巻き黄金週間
「GWの人氣スポット」鎌倉をTVに見れば雑踏の波
花びらの惜しみなく舞ふ若宮大路 バックパッカーや浴衣姿も
コロナ禍も超えて七夕クラス会ことしかりと吾にも誘ひ
夢を語りし滑川沿ひ小町通り「完吾ちゃん」と呼ぶ声がする
越路吹雪の話題はつめば「海開き」前に泳ぐと意気込むもありき
宝塚に憧るる友の父上は「敗戦国日本」ときびしき大人

近藤 栄 昭

荒川土手

・虹

荒川の土手盛り上げる菜の花に春の膨らみ風の膨らみ
 おちゆきて大きく膨らむ太陽が隠れる穴ある水平線に
 高さ見てくぐれると思う落日にエネルギー第二法則潜む
 日の光溢れる川幅荒川に匂う菜の花春はきたりぬ
 落日を止める力があると言ひ念じ攻めいる昏い目ブーチン
 菜と桜夜風に終わらす春の風荒川土手は今日から緑
 サクサクと海老の歯触り天そばに木の芽添えあり武威の蕎麦屋

近藤 芳 仙

ふくらむ

・信

田の畦にふくらむいくつ露のたう見つけしときは我もふくらむ
 なみよろふ峰峰の上に浅間山 白煙高く春の冠雪
 風のむき何処を指すや烏帽子嶺の雲は大きく右へかたぶく
 峰峰に四方を切れし大空を全てのやうに見て育ち来ぬ
 山の端の雲を真赤く染めあげて昇りくる陽よ明朝を待つ
 この春の兆す気配のかすかにて口紅色の梅はこころびぬ
 かかげたる黄色の炎れんげうは日毎くもる日差しに染まる

坂 上 直 美

ものうき春

・天

トランプは世界相手にカード切る我らは負けか切り札もなく
 君が寝息 傍に聞こゆる心地してふと目を覚ます午前三時に
 夏となり冬へと戻る昨日今日失われたる長閑けき弥生
 咳やまずひとり真昼に横たわる春闌けゆくに花咲くも見ず
 ようやくに風邪癒えて起き窓開く山にちらほら薄紅のいろ
 初めての駅に降り立つ春の午後知り人を見て心落ちつく
 その昔貧しき人の住むという五条あたりの空のやさしさ

坂 出 裕 子

桜

・洛

花水木、桃と花桃、小庭辺に満ちあふれをり春のよろこび
 もう春が来たねと蝶がさきやいて花から花に飛び移りをり
 空中に漂ふごとく真つ白に天に向かひて開く花びら
 ひらけゆく何があるかは知らねども日毎あかるし春の日差しの
 もうすぐに咲くから少し待つてと言ひし桜の花の満開
 今年また春に会へたと生きてゐるよろこび与へくる桜の
 あたたかく早くなればと楽しみにしてゐし川辺さくら満開

佐藤 道 子

思ひ出

・甲

百年の歴史は長しさりながら夫と七十年夢の間に過ぐ
 膝痛も腰痛も気にならざりし夫在る時の私の厨
 満足げに車椅子より見つめるし足の爪切る私の手許
 車椅子の夫とさ庭の日向はこ早春賦など歌ひてをりし
 夫のこと思へば涙あふれ来て思ひ出箱に鍵かけ仕舞ひき
 五年経ちやうやく亡夫と話する散歩に行きましょお花見しましょ
 澄んだ耳なり聞こえて亡夫が傍に来るお食事しましょおやつにしましょ

篠原 まり 子

絆

・羊

春に咲くクリスマスローズの不思議さはうつむき加減の姿にてこそ
 本箱の香川進の全集にそとと添えたる「直太の歌」を
 歌ことは一字一字が細胞とう三好直太に触れゆく夕べ
 桜・さくらの人の波過ぎゆかばミモザに染まるしじまがありて
 朝のパン必ずついばむ小鳥にはコーヒー如何一羽と一人
 「地中海」の歴史の詳細知る時に四十余年の日日いとおしき
 三好銀すでに他界と読みたれば親子の絆想いかなしむ

柴田登志恵 蒼

・天

帰らざる十羽あまりが川尻の花の筏に黙したるまま
ひひなさま桃咲く旧の祭り日に出てましかれどうすら雪降る
蒼き風柳をゆらし日のうらら いまだ雪積む争ふ園やも
明け前の桜の道はうす蒼く宙へとつづくゆるやかにつづく
身の調べわづか整ひ空の蒼うつす梢に鶺鴒く見ゆ
しやぼん玉弾くるまでのつかの間を生き延ぶる日日虹色うすし
つばくらめタワーマンションの地上からまたたく空の蒼にとけ込む

鈴木結志

水の言霊

・福

自らを歩む力の存続に転機待つより自力はぐくむ
生きすなわち知の域満たす表現の力はあつく生き地をつなぐ
たきつ瀬のしぶき虹織るせせらぎの水の言霊ひろいて歩む
忘れいし君との思いよみがえる今日の言の葉せせらぎの音
なつかしき川の流れのせせらぎに君のご詠歌よみがえりきぬ
水音をしずめ重なる花筏君の浄土へつなく道生む
たましいの浄化につなく花筏流れ埋めて夕日をまとう

関根榮子

後ろ手

・埼

訪ねたる知り人の門ゆっさりと被さることきもみじの若葉
隣り家の外壁塗装の足場組む職人の身軽き動き見ており
すいすいと足場を渡る職人のましろのごときは失礼なるや
あつてなく牡丹の散りてつじ咲く小さき庭も季はあざやか
腐葉土を作らん庭隅に選り分ける椿の落葉は腐葉土にならず
歩行難き夫を引き連れたどり着く公園の桜の近場の花見
テレビには酒場へ後ろ手の吉田類、ボアロも後ろ手の登場なりし

関根和美

母と娘

・埼

亡きひとの気配に醒むる丑三つの静けさやぶる朝刊の音
祖母の帯ほどきてさても何にせん明治の龍村ひかりはるけし
銭勘定の苦手なる身の半分は商人の血よ 母祖母曾祖母
よび寄せて母と暮らしし四半世紀娘のままでの日々安らかなりし
笹の枝を振りつつ狂い舞う母の子ゆえのかなしみ果てなきを知る
この朝は白鷺を見ず転生の母に逢えざることさみしき
鳥の眼に見下ろす界に見えますか少し違った今日の私が

高尾恭子

確かに生きる

・大

始まりはメジロのさえずり透明なサップグリーンの木洩れ日ゆれる
さえずらぬメジロ一羽を愛すべし時流に乗れぬ四月の目覚め
つましく流れる日々をさみどりの歯がふくらむ確かに生きる
アオモジのこずえの花の黄に染まりほんのり薫る生駒の山路
膝をかばい登る人あり色褪せたりユックに穂高のバジがひかる
登山靴ひきずる横をヒナ鳥のさえずるように子らが駆けゆく
夕かげに立つ榎の木にドングリの赤ちゃんがいる確かに生きる

高津砂千子

緋めだか

・平

あさまだきひとり机に向かい朝の光が壁に射しくる
たきあげし筈を食ふ昼茶し庭に繁れる緑ながめて
緋めだかの眠りているや水の面は静まりかえり姿の見えず
厚き葉のべペロミア置き連休をゆったり過ぐすひとりの時間
庭先に紫蘭群れ咲き蝶の飛ぶ五月の朝のこの平安や
この世には亡き人次つき浮かびきてわれは何為す 新聞を読む
わがうからの仲間となりし緋めだかのゆうゆう泳ぐ水の面空色

滝田靖子

春

・新

福寿草らふ梅蒲公英それぞれに春を堪能してゐる
花ふぶき浴びるつもりが三ヶ所の葉桜をただ見上げるばかり
来年は満開を見に来ようなど不確かな未来を約束しちやつて
懐かしい二時間ドラマ震災の前の町並み映りてゐたり
借りたことのある本何度も借りてきてその度読んだことあると思ふ
何故そんなものが欲しいのかガチャポンのカプセルに謙信の小さき甲冑
初夏へ季節はもう踏み出してゐるくねるに花水木芽吹いて

田土成彦

目玉

・宙

ひと冬の土中を出でて姤媼が濡れる肌に月光を浴ぶ
使ふことめつたにないがたしかめる鞆のスマホのああ電池切れ
思ひ切り叫んでみればどうなるか痴呆の振りしてやつてみようか
意味のない独り言口をついて出る深層心理などとも無縁
飛び出した目玉ちぎれた頭部など大根おろしの海に散らばる
深海に何見てゐしや蜚鳥賊の二つの目玉舌に転がる
「ミルクのふん」てふパンを買ふよく見ればあとに「わり」との言葉続いて

田土才恵

植え時

・宙

生あくび繰り返す日の気の緩みたまには体も休めておかな
月よりの使者と名付けしホタルイカわが食卓に酢味噌が香る
路の騒やと芽を出すこの春の待ち遠しかったひとつの想い
植え時を逃した球根時来れば負けじと伸ばすその花の芽を
球根を土に下ろせばそれなりの花は花なりの仕事を始む
目に見えぬ電波に今日も繋がれて遠住む人のおはようの文字
通じない言葉と思ひ会釈して座れど日本の人だったかも

玉井綾子

母子草

・羊

自らの急な変化を「ドライビングミスデイズ」に重ねて母は
分かるのに名が出てこない昔の前で母は思い出す「モーガン・フリーマン」
訪問の介護認定審査員に大谷のベットの茶を母は出す
たまに会う友人皆が母親の世話してる春 母子草摘む
先月は母が出来ることまだありき 人居の前にハナニラ終わる
桜から花水木、藤、錨屬へと入れ替わり母は如月のまま
庭に咲くは牡丹を花瓶に生けし夜に花びら数多玄関に落つ

中島央子

さくら

・森

九階の窓より見渡す大東京立錐の余地なき高層ビル群
眼下の川沿ひに続く桜木に花開く頃退院となる
隣り家の更地に残る一本の桜もほつほつ開き初めたり
代り映え無き日々を嘆かへば向かひ家の軒にカラス高鳴く
小犬「ハナ」抱きて桜ドライブに時はゆるりと過去となりゆく
気温差の定まらぬ日々を咲き出づるライラックの淡きむらさき
咲き満ちるリラの房花をよぐ日を娘が丹精の枝折られたり

永田進一

春の宴

・山

桜花咲き満つ園に集い来て酒宴となりぬ四月の放課後
藤棚の下に集いて花を愛で^{こころ}寿ぐわれら山桜の会
恐竜のティラノサウルスことなげに少年語る電話相談に
天体の神秘を語る少年の未来奪うなガザにウクライナに
万博の雨の一日さながらに世界の不安予測するかに
わが庭に山吹咲きて想わるる道灌の故事われの一代を
薔薇植えて土をふるえば蘇る記憶の底よりありし日のこと

永塚 節子 祭り

・銀

芽吹きにはいましばらくの林のなか灯をとますがにちこそぐらの花
こもり居の日日あわれ花を求め歩きたる日は遠くはるけし
この町に住みて五十年伸びやかな祭りのかけ声なじみとなりし
町の名を印す高張提灯がゆるりゆるりと神輿の前を
大正は遠くなりてもすめらぎの愛でにし藤の花房長し
甘藍の大きな葉の上を昨夜の雨のひとつぶふたつぶ光と遊ぶ
葉の上のいづれこぼる露なればいましばらくを遊べや遊べ

仲 西 正 子

健康寿命

・沖

二人して健康寿命の平均をこえてこれより日々の大切
思い立つ健康寿命へ足馴し前へ後ろへつま先歩き
週三日デイサービスへと通う友そういうことか老い初むを知る
まっすぐに葱坊主たつ玉葱にならぬけれども朝夕めぐる
つんつんと葱坊主たつ十歳の少年ときおり知らん振りする
男孫らと弾みて摘みつむサクランボ仕込みて二十歳の乾杯の酒
たつぷりと泡盛をそそ待ちまた十年もののサクランボ酒

中 村 博 子

疏水舟下り

・漣

穏やかな洛東高校同期生五人はびわ湖ゆ疎水に揺れる
時を超えびわ湖疎水の悠久の流れに乗りつつ船下りの旅
トンネルの舟から仰ぐと円形の空の見えたる一瞬のあり
下船してインクラインの石の道ごろごろ下る転ばぬように
船下り終えて湯豆腐「喜き起」へのタクシー待てる蹴上に手を上ぐ
筆談を宛ら「聞こえた?」「行ってきます」カードを繰りて夫へ見せお
幼き日「つんぼさん」とを呼ばれいし人となりたる夫は卒寿や

西 堤 啓 子

アトム

・天

アトムには心があった ロボットのやさしき歌を詠む日よ 地球
ツバメが低く飛べば雨 オスプレイが高く飛べばなに?
車内吊り広告も夜のレールも更新の旅はゆられてどこまで続く
まわり込む滝の裏側 BGMは空をぬらして垂直に散る
カルデラの時を溶かして街を抱き水基 まいまい めぐり続ける
紫外線クリームすりこみ息をとめ風の火口湖 硬玉のいろ
古カフェにあふれる光「つけあがりやがって」言葉ひとつにウグイスの鳴く

浜 谷 久 子

春物語

・地

白に白重ねる真白母よりの幸の散華は白木蓮の
雪柳ひと刷毛の白早春の冷えに小花のくつきりと咲く
雛月の花弁雪に立ち止まる白木蓮の春物語
降る雪の平の匂いに露の蓋ひとつがぼつりと春を目覚める
ひとひらの幸の降りくる白木蓮母の見守るひととせ早春
露の養土筆蓮のつきつきと目覚める春を摘む手冷たく
つくしん坊ひとつ見つけるその先にひよこりまたも畑のにぎやか

檜 垣 美 保 子

待つ

・昴

その色は背を秘めたる赤にして花芯さらさず蔽椿落つ
出口ばかりもとめていたる日もありて月よりの使者待つこと見上ぐ
雨水樹のなかに落ちゆく音はつか雨のちくもり蹲り聴く
右耳のいりぐちにいったん毛がはえていたり祖父のおもえは温し
春きたりカーテン越しの日のなかに皮膚うすきははの足さすりつつ
目を閉ずるははのまぶたのうごくとききつとこころがまたたいている
傾眠のはは今日は覚め二十日ぶり「おかえり」の声 待つははである

福田庸子

ひよどりの春

・今

本元由美子

城山の桜

・関

賜りし株の根づきて四十年猩猩袴片栗の花

持ちきたる人のおもかげあざやかに花の顔光まとも

沢の雪しるく残れる山容に今年の水の足らふを折る

一音の余る鶯今年また親から受けし春の啼き方

パンに飽き鶯の蜜をたどり吸ひふよどりの春やがて移ろふ

開く葉に光すべてを吸ひこまむ春紫苑占む庭のをちこち

春紫苑カナダアネモネいつの間に菜園陣取る外来種達

藤田美智子

少年の耳

・新

牧雄彦

マンダレー

・大

チャイム鳴る気配を聴くとらへたり授業の終り待つ少年の耳

泣きながら笑ひし春の日のありき蛍の光の曲流れるて

一年生の大きな返事聞こえたり今朝開きたる赤きチューリップ

俯きて咲きぬるなかに面上げるクリスマスローズの一輪のあり

人びとに花愛でらるる日の過ぎて思ひのままだに若葉を広く

語り出すまでの時間を思はせて牡丹は蕾のときを保てる

街なかに出くはすことのもうあらず避けぬし日日のとはくなりたり

藤森已行

霜柱

・銀

松浦禎子

半世紀

・羊

辛みとふ言葉を辞書で引いてみる恨みとの違ひ知りたくなりて

霜柱踏んで遊んだ幼き日その感触が残る足裏

霜柱踏めばサクサク音がした小学校へ続く坂道

お茶が好きお米が好きで演歌好き俺は立派な日本男児

薄暗き蛍光灯の部屋にゐる過去との遭遇楽しむ暫し

今年また桜に出会ふ嬉しさよ暫しの酔ひに身をまかせたり

川岸の河津桜は咲き誇りひと足早い春を寿ぐ

城山を覆ふ桜は朗々と百代をかけて城下を照らす

風薫る藤波の道に出会ふ人たれもゐなくて唯々歩む

ロリーエにローズマリーと並べ干す魔女のエルファバの緑の色を

とりどりのハーブを育て人びとを香草茶にて魔女の世界へと

筍の煮物の好きなわが夫に大鍋に仕込む味噌に醤油

夫と二人あさなあさなに見てまはる庭に牡丹の咲きつぎてをり

五十年をかけて作りたる花の庭老いの夫婦はかたみに語る

大地震にマンダレーの街崩れたり知る人いかにとテレビに見入る

美しきマンダレーの街大地震にけふも死傷者の増えつつありとふ

幾たびか訪ひしかの街廃墟のごと崩れしビルに立ちすくむ人

マンダレーの近郊の町アマラプラ織物の町活気に満ちるき

アマラプラも崩れをらむか優しかりし人らの消息いまだわからぬ

サンダース織物学校はスタッフは皆みな無事か誰か答へよ

マンダレーの街を見下ろす丘に来てイラワジ川の暮れゆくを見き

ベランダに立ちて眺むる夕つ日にわがゆく道のことわり問わず

建設後半世紀すぐるアパートの一角はひそかわれの天国

両足を椅子に持ち上げ眺めいる夕日のかた今日は事なく

春はまた若い季節と念を押し九十歳の峠を越える

よたよたの歩みなれども人の道外さず今日もいつものひと日

身めぐりのそのおおよそを成し終えて旧彼岸会の日時確かむ

かつての日春の彼岸は雪の道われに連れそいし人々は亡く

松本多摩子

連休ひとひ

・桜

ピタピタと部屋を行来の愛犬とベット同伴あわづ温泉
みどり美し子らとドライブ山笑うやさしさあふれる連休ひとひ
子の誘い東へ東へ六〇〇キロ桜あふれる近く遠くに
久し振りに幼き残る男孫野太き声に成長を知る

御殿場に花の季節に子を訪えば嫁よりもらいぬとらやの富士春
ふたりの手小さき足にやさしかり大谷さんのインスタ樂し
わが顔の写るを拒み旅終える記憶の中に孫らの笑顔

三浦好博

花御堂

・桃

青の濃き春の海には波のなしかしき手紙広げるやうに
花御堂の幼児に甘茶そして真似天上天下唯我独尊

私の歩を待ちては並び驚が鳴くよとは告ぐ丘を行きつつ

「コンベにて優勝したよ」「血尿が出て検査した」返事はあらず
疑はるるのが嫌なりてデパートのトイレの床の唾をぬぐひぬ
得意なる料理いく度戴きしを言ふに頷く友老いて病む
喃語にて対応されしことありて背筋伸ばせど老いは隠せぬ

三木まり

揺れ

・昂

隊列を整え北を指して飛ぶ冬鳥の群れに一羽おくれる
名を知らぬ鳥二羽がふいに舞い上がりまた舞い降りる河のほとり
今まさに飛び立つ鳥の形して白木蓮は風に揺れる

風に揺れ風にあらがう木蓮の白さ際立つ夕焼けの空
街灯に白く浮かぶ木蓮を揺らして過ぎる一陣の風
一陣の風過ぎてのち揺れている花が風を寿ぐように
流れゆく窓の景色に夏のいろ濃くなる夕べ 麦笛が鳴る

三好聖三

ふんわり

・伊

静かさを集めるように舟はいる冬の入江のまんなかあたり
芯のない話だったと猫が言うこれみよがしに欠伸をしつつ
そうだね、あれは一種の保身だね、周縁ばかりが賑やかでって
往復、家と畑の、それだけ？つまんねえなあ つまんねえか？
「ドラマ10」、当たりだよね、娘の声をすぐに背う妻もわたしも
ふんわりと猫が眠る茶の間にて吾はくるしみて言葉をいじる
書くことは傷つくことだという科白ねこが復誦している五月

御代田澄江

春の雨

・茨

晴れし日の陸月十五日彼岸前なるに墓園混み合ひ車満杯
墓碑近くに車を寄せてしみじみと墓を清めつ落葉も拾ひ
年度末に人員整理のありしとふ「父さん聞いて僕いま無職」
切切と父に訴ふる息子なり吾は静かにその声を聞く
春の雨夜来の雨よ降り続き日中過ぎてはまだ降り止まぬ
春風雨は雪となり雹も降る東京の影像凍ゆる彼岸
短歌少しみてやりしのみなるに妹ゆ米送り来ぬ玄米十キロ

もとむらしげと

ポケットの櫛

・そ

休日に刺らざりし髪が月曜の朝をますます忙しくする
整髪というに少なき髪なれど櫛一本をポケットに持つ
三階の教室へ行く足どりの重くなりけり古希まで二年
忘れもの取りに戻りてまた戻る息を弾ませ三階に着く
軽々と駆け上がりたる三十代茫々として夢幻のごとし
我が歳を「五十歳」という生徒には付度するなと忠告をしき
仕事好きならざりし我が今もなお学校にゆく子どもは好きで

桃原佳子

米価高騰

・沖

柜は冬その横の芍薬は春の楽しみこの狭き庭
花粉飛ばす杉をうらみし目で柜の満開あかず眺むる
風そよぐ並木通りを行きながら高齢者の事故頭に通りぬ
ウクライナに爆弾あまた落つる日の眺むる月はおそろしく照る
穀物は投機マネーにあおられしか米価の値段上がりゆきたり
今日は晴れ緋鳥の群れ眺め散歩に行くなごむひととき
風にのり青空泳ぐ鯉のぼり祝日なれど人影のなし

山下雅子

これから

・智

ゆっさゆっさ大樹ゆさぶる風のあり鎮守の森はざわめきおらむ
緑深き鎮守の森の安らぎに八重の桜はおっとり咲けり
木々なべて揺れに揺れいる視界なり窓越しなれど落ちつかずおり
しつとりと葉ざくらに降る雨静か花の終りをねぎらうことし
電線につかず離れぬきじばと二羽と向き合う傾くことし
ガレージに鯉のぼり泳ぐTさん宅子の声ひびき白髪動く
十階建てのマンション成りしわが町のこれから如何に見上げていた

山野幸司

本

・沖

山と戯む本より出て来たる魚女よ大好き花吹ぶく中
古本に囲まる部屋に生きる時降って来る物あらば心に満ちる
わが内を満たしてくる図書館の隅に時持つまだ青春がある
会ってみたい人あらば図書館の本一つ一つ丁寧にみる
出会いたき人あればこそ図書館の書棚に触れる柜の木肌
図書館のラウンジ坐る初体験ここに青春の椅子の置かるる
何もなき時持ち一人図書館に坐っておれば書物となりぬ

山本 孟

住み馴る

・大

帰り来て出かけしまの部屋に座す声なく過ぐるわが阿房宮
住み馴れし孤り居の部屋に籠りゐて老い匂ひならし珈琲を飲む
読みたきを未だ読めざる棚の本の油の尽きぬ間に読まん
母の胸に埋もるる嬰兒の眠りをりあの時母の広き背中よ
わが母は厨にマッチの火を熾し朝の支度を始めたたりけり
思ふこと多く残して逝く日までAの智を借りずに生きん
満開の桜東西南北のテレビに見入る朽ちゆくよはひ

養学登志子

難波神社

・凌

「雀ってこんなにかわいいものなのね」寄り来る人らの心なごます
神の苑注連をいただく楠大樹都会の真中雀のおあしす
異国の男性二人の立ちし宮居の前拍手そろいま深き礼なす
祈りを終え見合ふす顔に満つるもの桜見ながら階くだり来る
いずこにも心あずける神在して手合わすしぐさ美しきことかも
神前までのぼるは少々難儀なれどじゃらんと鈴の緒ひくもご挨拶
宮の桜ひととずつの色違えすがたのちがいつぶさにさくら

横田敏子

今生の色

・福

満開の桜並木よ 車椅子の夫と巡りしかの日頭ちくる
公園の木木いっせいに芽吹き初め五月の空を押し上げていく
出遅々真赤に燃えてそよぎおり燃ゆる命をそと抱きしむ
不自由とう言葉しみじみ噛み締むる思いどおりにならないこの身
通院の帰りの茶房のコーヒータっぷりミルク 疲れを溶かす
連休の最後はひと日こぬか雨連休の埃きれいに流す
雨上がりの庭にとびきり艶やかなぼうたん、つつじの今生の色

久我田 鶴子

悼・川島貞夫

・羊

妻の歌をいちばんと褒めうたがはぬ川島さんなり逝きてしまへり
 羊の会発足メンバ―たりしひと地中海去らず終なる日まで
 突然の小野さんの死にいくほどを褒められたるやその人生の
 小野茂樹なき地中海を盛りたてむ思ひあきらか江口・川島
 地中海とともにありたる青春期かがやかしきを忘れ得ぬまま
 みづからはうたはずなれど歌のそば離れず歌の友をはなれず
 筑摩から歌集を出すところある日の川島さんは言ひし忘れず



● 地中海叢書・新刊案内 ●

- ・藤井鴻江遺歌集「風の坂道」(第954篇) 九曜書林
- ・石田明彦歌集「ロードノイズ」(第955篇) 九曜書林
- ・泉 嘉穂子歌集「石見神楽」(第956篇) 二六〇〇円＋税
- ・中山真弓歌集「空色のママチャリ」(第957篇) 九曜書林
- ・牧 雄彦歌集「メコン渺々」(第958篇) 七〇〇〇円＋税
- ・久我田鶴子著「海に金槌ーわが短歌小史」(第961篇) 砂子屋書房 二五〇〇円＋税
- ・久我田鶴子著「冬潮を航くー三好直太の歌」(第962篇) 六花書林 二〇〇〇円＋税
- ・若松喜子歌集「車椅子のうた」(第960篇) ながらみ書房 二六〇〇円＋税
- ・鈴木剛之歌集「安積春秋」(第963篇) 九曜書林
- ・本村誠人歌集「よしなしこと」(第964篇) 南日本新聞開発センター
- ※お問い合わせ・ご注文は著者に直接お願いします。ただし、藤井鴻江遺歌集については檜垣美保子さんに。九曜書林からの出版物については、価格の記載はしていません。

《近刊》

- ・御代田澄江歌集「花のセレナーデ」(第959篇) ながらみ書房
- ※歌集・歌書を出版される際には、地中海叢書番号をご請求ください(「クリップ」参照)。地中海叢書として登録し、本社に保管します。希望があれば、本誌に4ページまで無料で批評のページを設けることができます。